弘　前　医　学　67：110―114，2016

# 第153回　弘前医学会例会

〔日時：平成28年１月22日（金）13：00～
場所：弘前大学医学部コミュニケーションセンター〕

## 例　会　講　座

## 「子どもたちの現状と課題」－養育環境としての学校－

弘前大学大学院医学研究科附属　子どものこころの発達研究センター　特任准教授
栗　林　理　人

**【はじめに】**

子どもの精神科臨床に取り組んでみて，まずは子どもとの１対１の治療関係の重要性に気づかされました．もともと子どもたちの中に回復していく力が存在しており，治療者にはその力をうまく引き出して心の成長を促していくことが求められているわけです．したがって，我々が子どもの心の発達，成長を妨げるものを整理して理解を深め，現代の子どもたちにどのように対応，対処していくかについて考える必要があります．

**【子ども（個）側の問題】**

子ども自身が生物学的な要因である遺伝的な要素を先天的に有している場合，子どもの成長は定型的な発達とは異なり，精神科治療においてもなかなか心の成長を促すことが困難なケースが認められます．子どもたちに治療的なかかわりを持つ方々には，子どもの心の発達とその特性について理解を深めることが求められます．

**【養育（環境）側の問題】**

1980年代に牛島定信によって報告された「思春期病理の時代的変遷」によると，1950年代・対人恐怖症，1960年代・登校拒否（不登校），1970年代・家庭内暴力，1980年代・校内暴力やいじめが挙げられている．その後も，児童虐待，心的外傷，ひきこもり，ニートなど，思春期の問題が世の中で話題になっていた．これらの背景には，要因の１つとして家族構成の変化（核家族化）などによる「家庭機能・養育機能の低下」が存在していると考えられている．今や女性の社会進出もあいまって，家庭における養育機能，養育環境を整えることは困難となってきている．

ここで，集団を把握する上で重要な３つの原則を説明しておく．集団の原則であるので，家族・家庭から教室，学校，地域などへも適応できるものである．まず，第１番目の原則は「ひずみ（歪み）は，弱い部分に出る」である．これは，家族・家庭などの集団をシステムとしてみた場合，子どもが小さければ，嫁－姑問題や両親の夫婦関係問題のしわ寄せが子どもに影響を及ぼすというものである．父親が父親らしく振舞えていない家族・家庭においては，小学校高学年で男の子が不登校を呈することがある．このような男の子の治療がうまくいく時には，その子の父親もお父さんらしくなるということが認められる．次に第２番目の原則としては，「未熟な集団はスケープゴートを生む」である．目的をしっかりと持っていない未熟な集団の中では，自然といじめの対象とでも言うべき犠牲者が作り上げられ，それにより集団が表面的に安定するようなことが生じている．しかしながら，経験のある小学校低学年の担任教師は，いじめの対象になりそうな目に見える障がいを有する生徒をクラスの目標として，思いやりのあるクラスを作り上げている場合が多い．そして最後，第３番目の原則としては，「子どもたちに向き合い受容すると退行を認める」である．家庭・家族や学校が子どもたちと向き合い受容すると，子どもたちは子ども

返り（退行）をして様々な心の発達上の問題を表出してくる．

**【子どもたちの養育環境としての学校】**

最近では，遺伝子レベルの世界でも「遺伝子が存在しても，それが発現するかしないかは環境次第である」，「遺伝子と環境の相互作用」，「遺伝子自体が環境によって後天的に制御される（エピジェネティクス）」などと，環境の重要性が指摘されるようになっている．とくに多因子疾患と考えられる発達障害（自閉スペクトラム障害，注意欠如･多動性障害，学習障害など）では，彼等の発達とその特性を理解した適切なかかわりを継続することで，その後の経過，予後が良好となることが確認されている．家庭機能･養育機能の低下が認められる中，一般の子どもたちが長く過ごしている学校でこそ，子どもたちを育てる機能を発揮せずには，しっかりとした子どもたちの心の成長は望めない時代に入っている印象がある．それぞれの地域において，そこにある学校がコミュニティーの中心的な存在となり，学童保育や地域住民の協力を得ながら，その地域で子どもたちを育てていく風土を確立していくことが望ましいと考えられる．

**【少子高齢化と言われる中で】**

平成24（2012）年７月，文部科学省は「これまで必ずしも十分に社会参加できるような環境になかった障害者等が，積極的に参加･貢献していくことができる社会」，すなわち『共生社会』の形成を目指して，特別インクルーシブ教育システムの構築（特別支援教育の推進）を掲げている．どの地域にも，役所，病院そして学校が存在します．もし，その地域にある学校が子どもたちを育てる環境として十分に機能するならば，子どもたちは１人１人が大切に育て上げられ，すぐには結果が出ないかも知れませんが，将来的にはその地域を支えていく若者たちに成長するのではないでしょうか．弘前大学が立地されている，この弘前市にあるそれぞれの小中学校が，子どもたちの養育環境として機能することを願ってやみません．子どものこころの発達研究センターでは，神経精神医学講座らと連携して，学校の機能の向上と維持のために，こころのサポートアンケートをはじめ，こころの授業，事例検討会，講演らを通じて，学校を支持していきたいと考えています．